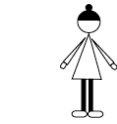




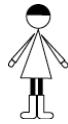
市田柿の産地である高森町では、昔ほどの家の軒先でも柿をつるす「柿すだれ」が見られませんでした。しかし、品質管理の面から、徐々に姿を消していきました。

将来までこの風景を守ろうと、住民が活動を始めます。農家にも協力を仰ぎながら、イベントを開催し、柿すだれの復活に取り組みました。

商工会や行政でも、市田柿を地域ブランドとして活用した町の活性化に乗り出しました。産業としての市田柿と、風景としての柿すだれの両立を目指し、まちづくりが進んでいます。



市田柿風景の会



農家

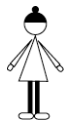


商工会+JA



行政

きっかけ



地元写真家

地域の素晴らしい景観である「柿すだれ」を復活させたいと「市田柿風景の会」を設立した。

活動

柿すだれの風景を残そうと、「市田柿風景の会」立ち上げる

イベント「市田柿の風景に出会える日」(柿すだれ見学まちあるき)の開催  
町民ギャラリーでの市田柿創作展の開催

市田柿ブランド化事業の開始  
旅行会社のツアーの企画・誘致

「市田柿」を地域団体商標に登録  
協議会、委員会を設置し、市田柿を活用した町の活性化方策を検討

効果

- 柿すだれの価値に対する市民の関心が高まった
- 柿すだれツアー開催により、観光客が増加している
- 行政・商工会で、柿すだれを活用した町の活性化の取り組みが始まる

## 市田柿風景の会

- まちあるきイベント「市田柿の風景に出会える日」の開催
- 町民ギャラリーで市田柿創作展開催

## 農家

- まちあるきイベント「市田柿の風景に出会える日」に合わせて、軒先に柿すだれをつるす

## 行政・商工会・JA

- 町の施設での柿すだれの展示
- 柿すだれツアーの企画・誘致
- 写真コンテストの実施
- 「市田柿」の地域団体商標登録
- 行政、商工会、JAが中心となり「市田柿発祥の里活用推進協議会」を発足
- 「市田柿の由来研究委員会」発足

1830~

衛生面を考えて 屋内で作ること

家々の軒先につるされた柿すだれは、以前は初冬になると町中で見られた当たり前の風景でした。

通達

しかし、品質管理の面から、屋外に柿をつるす光景はほとんど見られなくなっています。

昔ながらの柿すだれもう見られないのかな…

いやっ!! 地域の宝として残したい!!

農家のみなさん協力して

柿すだれを復活させたい!!

市田柿の風景の会

1833

このまま「柿すだれ」の風景が失われてしまうのは借しいと、地元の写真家が「市田柿の風景の会」を立ち上げます。

柿すだれを見て歩きましょう

市田柿の風景に出会える日

市田柿創作展

会では、農家の協力を得て、軒先に柿すだれをつるしてもらい見て歩くイベントや町民ギャラリーでの市田柿創作展を開催しました。訪れる人も少しずつ増えていきます。

軒先に柿すだれの風景がほとんど見られなくなっていく中、毎年変わらず鐘楼に自家製の柿すだれをつるしているお寺も見られます。

市田柿をブランド化しよう

町活性化に役立てよう

市田柿写真コンテスト

行政も、柿すだれを観光資源として活用していこうと取り組みを始めます。

来客数の減少に悩んでいた「蘭ミュージアム」では、「柿すだれツアー」を企画します。タイアップしてくれる旅行会社が現れ、企画が実現しました。周辺各地から観光客が訪れるようになり、来客数の増加に繋がっています。

2001

商工会では、産業振興のために地域の特産である「市田柿」のブランド化を目指して動き出します。ブランド化することが産業振興だけでなく、まちづくりの大切な要素になると考えました。

町役場

町役場の入り口には、職員自らが作った柿すだれをつるしています。

2007

「市田柿」地域ブランド認定

軒先を貸してくれませんか

きれいな風景!! ぜひ写真が撮りたい

写真を撮りたいという希望が多く寄せられており、町では農家の軒先を借りて、柿すだれをつるす計画を立てています。

市田柿の由来 研究委員会

市田柿の発祥や名前の由来、歴史を明らかにして、町の活性化へつなげようと提言をまとめました。

市田柿発祥の里 活用推進協議会

市田柿の知名度向上や地域産業の活性化、観光とのタイアップを考える協議会を立ち上げました。

## □ 景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント □

## 原則1 《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

## ● 地域の特産品が生み出す古の風景を伝承

- ・ 「市田柿」の発祥の地である高森町では、農家の家々の軒下に吊された干し柿の風景は、晩秋の風物詩といえるものでした。衛生管理の面から干し柿を屋外で乾燥することがなくなっていく中、高森町の人々が取り組んでいるのが、この「柿すだれ」の風景を残し、伝えていこうとする活動です。地域の特産品がつくり出す昔ながらの風景を伝承すべく、様々な取り組みが行われています。

>> 地域の昔ながらの景観を残そうとする取り組みは、地域の文化や風習を伝えていく取り組みでもあります。

## ● 「柿すだれ」の風景を通じた「市田柿」ブランドのPR

- ・ 高森町の農家の人々にとって干し柿は、冬場の農閑期の生計を助ける重要な産業です。「柿すだれ」の風景を残し、その良さを全国に発信しようとする取り組みは、「市田柿」ブランドの知名度の向上にも繋がっていきます。高森町の取り組みは、風景づくりを通じて地域の特産品をPRする活動であるとも言えます。

>> 地域の農業景観や産業景観を守る取り組みは、農業や産業を守り、支援していくことにも繋がります。

## 原則2 《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

## ● 地元写真家が設立した「市田柿の風景の会」

- ・ 「柿すだれ」の風景を残したい、そう願った地元の写真家（唐木孝治氏）が立ち上げたのが「市田柿の風景の会」です [平成11年（1999）]。農家の方々の協力を得て、軒先に柿すだれを出してもらうイベント「市田柿の風景に出会える日」 [平成12年（2000）から] を開催するなど、「柿すだれ」の風景を守り、伝えていくための活動に取り組んでいます。

>> 同じ思いを持った賛同者を集めることで、活動に広がりが見えてきます。特に、イベント等の開催には、様々な人々の協力が欠かせません。

## ● 行政や住民による「柿すだれ」の展示

- ・ 産業としての干し柿と、ふるさとの風景である「柿すだれ」の両立が模索される中、行政や住民により、「柿すだれ」の演出が行われています。地元の古刹である松源寺では、毎年、鐘楼に「柿すだれ」の展示を行っています。役場の入り口には、職員自らが作った「柿すだれ」が展示されています。また、産直センターの建物の軒下にも「柿すだれ」が吊されています。このような地道な取り組みが、地域の風景を伝え、訪れる人々の目を楽しませています。

>> 景観まちづくりには継続的な取り組みが欠かせません。行政などによる地道な活動が、人々の景観への関心を高めることに繋がります。

### ●市田柿を活かしたまちづくりに向けた協議会、研究委員会の設立

- ・ 行政を中心として、「市田柿」を活かしたまちづくりを進めるための取り組みが進められています。
- ・ 「市田柿」が特許庁によって地域団体商標として登録されたのを契機に、行政や農協、商工会、高森町まちづくり振興公社によって、「市田柿発祥の里活用推進協議会」が設立されました [平成18年 (2006)]。「市田柿」の知名度向上と、地域産業の活性化を目指した活動に取り組んでいます。
- ・ また、行政により設立された「市田柿の由来研究委員会」では、文献調査や、地域の古老や関係者からの聞き取り調査により、「市田柿」の由来や歴史を研究し、その成果を元に、「市田柿を活用したまちづくりへの提言」をまとめ [平成20年 (2008)]、町長に提出しました。

>> 景観まちづくりの取り組みには、多方面からのアプローチが欠かせません。複数の主体が連携することで、様々なアイデアが生まれてきます。行政はもちろん、商工会や農協なども重要な役割を担っています。

### 原則 3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

### ●「市田柿の風景に出会える日」等のイベント開催を通じた関心の喚起

- ・ 「市田柿の風景の会」や高森町商工会では、「柿すだれ」の風景を残し、「市田柿」の知名度を向上させようと、様々なイベントに取り組んでいます。
- ・ 「市田柿の風景の会」では、農家の協力を得て、柿すだれを軒先に吊してもらうイベント「市田柿の風景に出会える日」を開催しました [平成12年 (2000) から]。写真愛好家をはじめとして、「柿すだれ」の風景を目当てに訪れる観光客の誘致に成功しました。また、「高森町歴史民族資料館」を舞台に、「市田柿創作展」を開催し、「市田柿」をテーマとした絵画や写真等の募集・展示を行いました [平成12年 (2000) から]。「市田柿」をブランド化しようという取り組みを進めている商工会議所でも、「市田柿」をテーマとした写真コンテストを開催しました [平成15年 (2003)]。

>> 地域の人々が気軽に参加できるイベントを開催することで、身近な景観への関心を高めることに繋がります。また、各地から人々が訪れたり注目されたりすることで、地域の人々が、地元の良さに気づき、見直すきっかけになります。

### ●旅行会社とタイアップした「柿すだれツアー」の実施

- ・ 「高森町まちづくり振興公社」が運営する「蘭ミュージアム」は、来客数の減少に悩んでいました。この状況を打開すべく、役場が企画したのが「柿すだれツアー」でした。「蘭ミュージアム」の正面玄関や庭の特設会場で「柿すだれ」の展示を行い、この「柿すだれ」の見学を組み込んだツアーを旅行会社に売り込みました。これにタイアップする旅行業者が現れたことから「柿すだれツアー」が実現されました [平成18年 (2006) から]。周辺各地から観光客が訪れるようになり、「蘭ミュージアム」の来客数の増加に繋がっています。また、庭の特設会場では、地元の農産物等の販売も行われています。

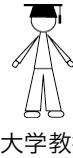
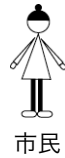
>> 地域の特徴的な景観は、重要な観光資源にもなります。様々なアイデアでPRしていくことで、地域の活性化にも繋がります。



武家屋敷や寺院、町家などの歴史的街並みが広がる臼杵市。その中心部に位置する中央通り商店街は、商業機能の衰退とアーケードの老朽化を契機に、リニューアルに取り組みました。

恵まれた立地と建物を活かして歴史的な街並みを形成すべく、アーケード撤去や店舗の外装改修、電線類地中化等を行いました。さらに、空き店舗対策のソフト事業にも取り組みました。

周辺との調和も生まれ、住民にも観光客にも愛される魅力的な商店街になりました。π



商店街振興組合

市民

行政

大学教授



商店街振興組合

商業機能が衰退し、アーケードが老朽化した商店街を、活性化したいと考えた。

活動

商店街の衰退とアーケードの老朽化  
周辺での歴史的まちなみ整備の進展

商店街振興組合でアーケード撤去の決議

商店街の街並み整備の計画策定

商店街のアーケード撤去と街並みの整備

商店街の愛称募集

商店街の空き店舗対策

効果

- 商店街の老朽化したアーケードの問題が解消され、歴史的な街並みが整備された
- 地元住民や観光客が訪れるようになり、商店街が活性化した
- 臼杵市の旧市街で、歴史的街並みの連続性や回遊性が形成された

商店街振興組合

- アーケードの撤去と外装改修による街並み整備
- 空き店舗対策などの商店街活性化の取り組み

市民

- 商店街周辺での、自主的な歴史的建造物の保存・再生と、まちなみ整備
- 商店街の街並み整備の支援

行政

- アーケード撤去や商店街各店舗の外装改修、電線地中化等に対する補助

大学教授

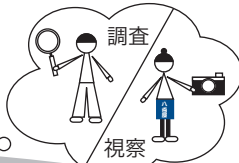
- 商店街の街並み整備の計画策定の支援



1986~

商店街をなんとかしなくちゃ

活性化するには？



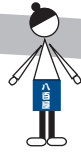
1990

歴史的な街並みを活かした活性化が提案されますが、再開発ビルによる活性化を望む声もあり、このときは具体的な行動には繋がっていませんでした。

調査しましょう  
こうしてはどう？

- ・アーケードの撤去
- ・伝統的建物の整備
- ・商店街愛称の変更

〇〇新聞  
人口減少  
モータリゼーション  
どうする、商店街！



商店街では、活性化のための調査研究や視察に取り組みます。



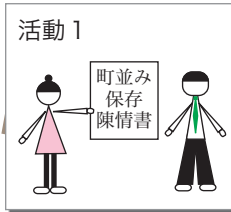
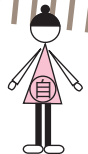
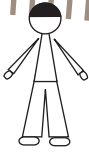
報告書

1990~

臼杵はきれいな町  
残さなくちゃ

協力するよ

商店街の周辺では、歴史的な街並みの整備が始められました。



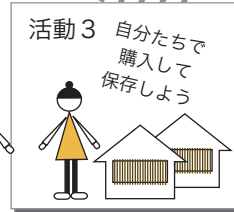
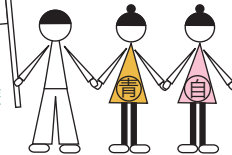
アーケード  
古くなっちゃった  
どうしよう？



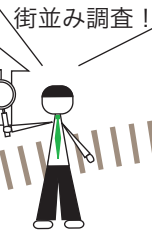
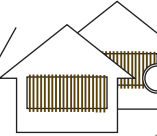
商店街の活性化を模索している間に、アーケードの老朽化が問題となっていきます。

臼杵の歴史景観を守る会

地元建築士などにより「臼杵の歴史景観を守る会」が結成されます。



これは保存  
しよう



街並み調査！

みんな頑張ってる  
市でもやろう

この頃、新聞で街並み保存運動に関する連載が行われたこともあり、市民にも街並み意識が育っていきます。

私も景観  
考えよう

〇〇新聞  
連載第〇回  
町並み運動

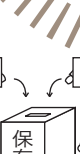
アーケードは  
必要ない！  
撤去だ！



必要だ！  
ドーム化だ！



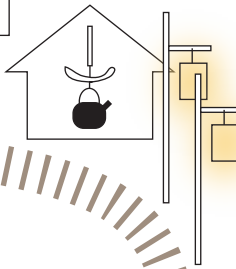
修復のために  
補助しよう  
寄付します



1997

- ・保全地区の指定
- ・保存建物の指定

歴史的環境保全条例



協議の結果…

ドーム化決定



アーケード必要派と撤去派の激しい議論の末、総会でドーム化が決定します。

1999

街並み整備の  
参考に

1999

- ・歴史的建造物の再生
- ・電線地中化
- ・石畳敷設
- ・街路灯設置

景観ガイドライン

地元建築士会によって、地区別の景観参考図集である「景観ガイドライン」が作られます。



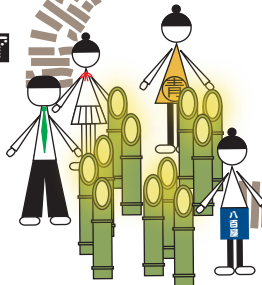
ちょっと待って！  
アーケードだけ  
考えたらそれで  
いいの？



歴史的街並みや歴史的建造物を活かした活性化の方がいいのではという声も上がるなか、事業費用が問題となり、結局計画は白紙に戻ることになります。

1997

歴史的街並みの整備が進むと、中心市街地への集客イベントとして、竹の中をろうそくを灯す「うすき竹宵」が催されます。住民がまちの隠れた魅力に気づききっかけにもなりました。



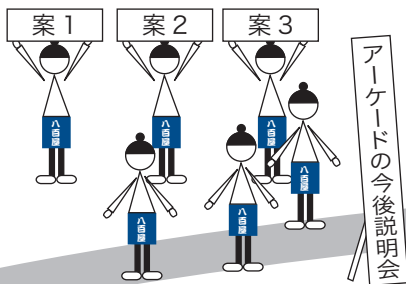
事業費用が  
揃わない…

ドーム化白紙



振興組合では、地元建築士の協力を得ながらアーケードの対処について検討を重ねます。その結果、総会でアーケードの撤去が決まります。

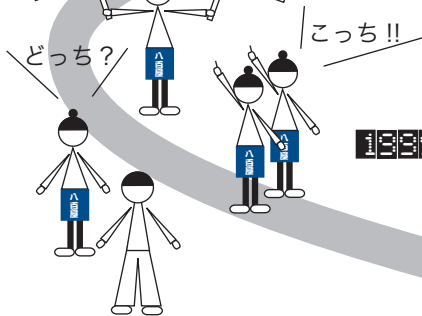
様々なケースがあります



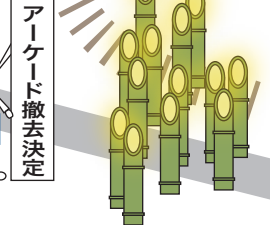
アーケード  
なんとかしないと  
危険だって…

ドーム化を断念した商店街からは、スーパーが撤退し、空洞化が深刻化していきます。さらにアーケードの老朽化も進み、対処に迫られていました。

アーケード撤去  
現状維持

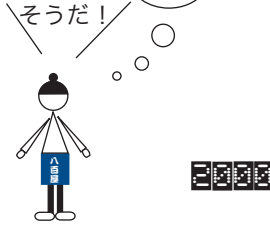


臼杵で、2度目の「全国町並みゼミ」が開催されます。商店街の街並みについても議論されました。



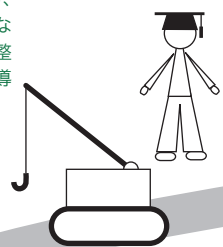
まつりの経済効果をねらって、「うすき竹宵」の開催範囲が商店街まで拡大されます。

さあどうやって  
いこう？

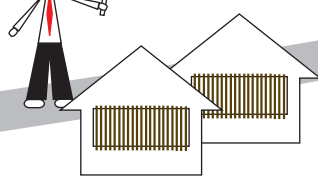


まとめ役になり  
指導しましょう

県の支援事業を活用しながら、商店街の空間整備が着々と進められていきます。これらの整備は、大学の先生による指導のもとに進められました。

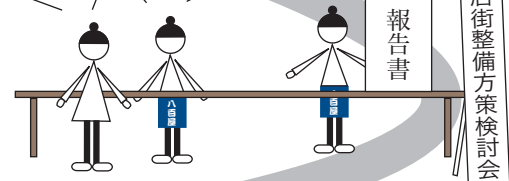


これを活用  
しよう  
地域商業  
魅力アップ  
総合支援事業



ファサード/電線地中化！  
整備！

これを参考に  
しよう



整備方策検討の拠り所としたのが1990年に提案された「報告書」でした。これをもとに、周囲の歴史的な街並みに合わせた商店街の整備の検討が進められます。

今度はソフト  
事業だ！

親しみを持てる  
愛称かあ

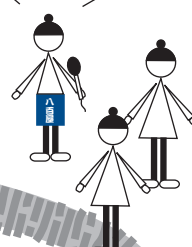
商店街  
愛称募集中！

愛称は…  
八町大路に！

- ・ファサード改修
- ・電線地中化
- ・アーケード撤去
- ・街路灯・石畳設置
- ・公共施設整備



街並み整備が一段落すると、今度はソフト事業に取り組み始めます。まずはリニューアルした商店街に愛着を持ってもらおうと愛称を募集しました。



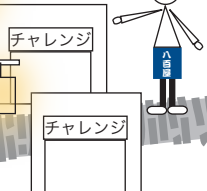
お店やって  
みませんか？

レストラン  
やります！

特産品  
売ります！

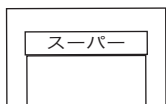
空き店舗を  
活用して…？

チャレンジ  
ショップ！



空き店舗を格安で貸し出し、商店街に不足している業種を誘致しました。

街並みが整備された商店街には一度撤退したスーパーが戻ってきました。



## □景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント□

## 原則1 《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

## ●商店街各店舗の、建物の持つ価値の認識

- ・商店街の各店舗は、アーケードを設置した際に、工事のために屋根の一部を切断してモルタルによる塗装の処置を行っていました。また、長年商売を営む中で、必要に応じた改修を行っていました。しかし、これらの建物の中には、古くからの町家の形式を持つ建物が多く残されていました。
- ・このような建物の持つ価値に着目して、外装の修景を行い、往時の姿をよみがえらせる努力を行ったことで、歴史的なまちなみが形成されることとなりました。また、一部の店舗では、建物の内装も改修して、建設当時の姿をよみがえらせています。

>>建物の中には、長い年月が経過する中で、補修や改修等が行われているものがあります。建物の構造や工法などは、外見からでは分かりにくいですが、注意深く調べてみると、建物を持つ価値が見えてくることがあります。

## ●周辺の歴史的まちなみとの調和の形成

- ・中央通り商店街は市の中心部に位置しており、周辺には武家屋敷や寺院、町家が残されています。商店街リニューアルにより、まちなみ整備が行われたことで、周辺のまちなみとの連続性がうまれました。まちなみが整備された商店街には観光客も訪れるようになりました。

>>景観まちづくりの方向性を考える際には、地域の中での位置や周囲の状況も考慮しましょう。周辺との関係性も大切な要素の一つです。

## 原則2 《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

## ●歴史的まちなみ整備を導いた、専門家による提言・指導

- ・中央通り商店街のリニューアルが、歴史的なまちなみ整備へと進んだ背景には、専門家による提言や指導がありました。商店街の活性化方策検討のために西村幸夫東京大学助教授（当時）によって行われた調査 [平成2年（1990）] では、アーケードの撤去や伝統的な建物の整備、商店街愛称の変更等が提言されました。この提言は、当初は実現には至りませんでした。商店街リニューアルの方向性が、アーケード撤去と歴史的まちなみの整備へ変更されてからは、計画策定の拠り所となりました。
- ・振興組合がアーケード化を決議した際には [平成5年（1993）]、当時、大分県議会議員であった後藤國利氏（平成9年（1997）より臼杵市長）からも、老朽化したアーケードだけを考えるのではなく、歴史的なまちなみに囲まれた立地を活かして、観光客を取り込みながら商店街を活性化することが提言されました。
- ・平成12年（2000）以降、アーケードの撤去やまちなみ整備が行われた際には、三島伸雄佐賀大学助教授（当時）によって指導が行われました。



>>景観まちづくりの方向性を見極め、合意形成を図っていく上では、専門的・客観的な視点も大切になります。外部の専門家を交えることで、その役割を担ってもらうことができます。

### ●市民有志の歴史景観保全活動と行政によるまちなみ整備

- ・中央通り商店街のリニューアルによる歴史的まちなみ整備が実現した背景には、「白杵の歴史景観を守る会」[昭和50年(1975)設立]などの、市民有志による長年にわたる景観まちづくりの取り組みがありました。白杵の歴史景観の価値に気付いたこれらの人々は、取り壊しの危機にある歴史的建造物の保存運動を行い、時には、自費で購入・保存するなど、精力的な活動を続けていきました。また、全国から景観まちづくりに取り組む人々が集まるイベントである「全国町並みゼミ」を誘致・開催[昭和58年(1983)]するなど、市民の啓発にも取り組んでいました。
- ・これに後押しされる形で、白杵市でも歴史的建造物やまちなみ整備に取り組むはじめ、歴史的環境の保全のための基金条例[昭和60年(1985)]や歴史的環境保全条例[昭和62年(1987)]を策定し、歴史的建造物の保存・再生や、まちなみ整備に取り組みました。この際には、地元建築士会が、現況調査に協力したり、「街なみ環境整備計画」を策定したりするなど、重要な役割を果たしました。
- ・市民有志や行政によるこのような取り組みにより、歴史的なまちなみ整備が進んでいったことが、中央通り商店街リニューアルでの歴史的まちなみ整備を導いたといえます。

>>景観まちづくりが進んでいくためには、まち全体での取り組みが欠かせません。まちなみ整備の進展が、周囲の人々に対する啓発となり、活動の広がりへと繋がっていきます。

>>まちなみ整備においては、地元のことをよく知る建築士会等の役割も大切です。

### ●商店街関係者の合意形成を導いた振興組合の丁寧な説明

- ・アーケード撤去の決議に至るまで、中央通り商店街では1,500時間にも及ぶ話し合いが重ねられました。中央通り商店街は3つのブロックから構成されており、意志決定の際にはブロックの意向が重要になります。そこで、振興組合は、アーケードを現状維持した場合、撤去した場合、ドーム化した場合など、いくつかのケースについて、問題点や事業費用、工事の進め方等を比較した資料を作成し、各ブロックへの説明を2回ずつ行いました。この努力の甲斐あって、商店街関係者の合意が形成されました。

>>景観まちづくりには多くの人の一体的な取り組みが必要です。特に、事業面(資金面)での合意形成は大きなポイントとなります。地縁組織等にも配慮しながら、分かりやすく丁寧な説明を心がけましょう。

### ●商工会議所や行政による、中央通り商店街も含めた中心市街地活性化の取り組み

- ・中心市街地の活性化が喫緊の課題となっていく中、商工会議所や行政が中心となって、その対策に取り組みました。平成10年(1998)から、商工会議所を中心とした検討が進められ、「白杵市中心市街地活性化基本構想(案)」がまとめられました[平成11年(1999)]。これを受けて市でも検討に取り組み、「白杵市中心市街地活性化基本計画」が策定されました[平成12年(2000)]。このような取り組みの中で、地元の建築士等も交えながら、中央通り商店街のあり方についても議論が行われたことが、アーケード撤去とまちなみ整備へと繋がっていきました。
- ・また、中央通り商店街でアーケードの撤去が決議された直後には、「白杵の歴史景観を守る会」[昭和50年(1975)設立]が中心となって、白杵市で2回目となる「全国町並みゼミ」が開催されま

した [平成11年 (1999)]。この中で、「中心市街地活性化」をテーマとした分科会が開催され、中央通り商店街のまちなみ整備等について議論が交わされました。

>>景観まちづくりの方向性を考える際に、様々な組織と連携したり、外部の人々の意見を参考にしたりすることで、目指すべき方向性が見えてきます。

### 原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

#### ●地域の祭りを通じたまちなみ意識の醸成

- ・ 中心市街地の活性化が課題となる中で、平成2年 (1990) に、市民有志らの発意を受けて、商店街連合会によって「あきんどまつり」が開催されました。まちの中心に位置する広場 (辻広場) での「城下町大迷路」や、商家ギャラリーなどの催しが行われました。これをきっかけとして、中央通り商店街においても、イベントやソフト事業の重要性が認識されるようになりました。
- ・ 平成9年 (1997) からは、市内の若者有志や市職員による組織等によって、竹の中にろうそくを灯す竹ぼんぼりや竹のオブジェを展示するイベントである、「うすき竹宵」(当初の名称は「竹・光・芸まつり」)が開催されるようになりました。当初は限られた範囲での開催でしたが、4年目以降は、観光での経済効果を狙って開催範囲が拡大され、中央通り商店街も「うすき竹宵」の会場となりました。
- ・ これらのお祭りを通じて、商店街や地域の人々が、まちの持つ価値や魅力に気付くこととなりました。また、観光客からまちの評価を受けたことで、まちに対する誇りが生まれていきました。このような意識が醸成されたことが、まちなみ整備の取り組みへと繋がっていきました。

>>地域の祭りは、住民がまちを見つめ直し、まちの持つ価値や魅力を再発見するきっかけになります。また、観光客等の来街者から評価を受けることで、住民のまちに対する誇りが生まれてきます。このような意識が、積極的な景観まちづくりへと繋がります。

#### ●補助制度を活用した店舗の改修と通りの修景

- ・ アーケードの撤去と、歴史的まちなみ整備の実施においては、大分県の補助事業 (地域商業魅力アップ総合支援事業) 等が活用されました。これによって、各店舗の負担が軽減され、計画が実現されました。

>>行政は様々な補助制度を設けています。景観まちづくりの方向性や目的を明確にし、適切な制度を活用することで、計画が実現に導かれます。

#### ●商店街の愛称募集・チャレンジショップ事業による地域との密着

- ・ 商店街振興組合では、リニューアルをきっかけに、地域の住民に一層親しまれる商店街となることを目指し、商店街の愛称を募集しました [平成15年 (2003)]。900通余りの応募の中から、「八町大路」(はっちょうおおじ) と命名されました。「八町大路」とは、商店街周辺に8つの町があることが由来になっています。
- ・ また、空き店舗対策と賑わいの場の形成にも取り組みました。「チャレンジショップ事業」を実施し [平成15年 (2003)]、家賃の補助や内装改修費の補助を条件に、商店街に不足する業種・業態

の出店者を募集したところ、白杵の特産品や土産物の販売店、飲食店、展示施設など7店舗が開設されました。

- ・白杵市は、国宝「白杵石仏」が有名で、毎年多くの観光客が訪れています。中央通り商店街のリニューアルにより、ソフト・ハード両面での整備が行われたことで、市内に残る歴史的まちなみや歴史的建造物を訪れていた観光客に加え、「白杵石仏」を目当てに訪れていた観光客が、中央通り商店街を訪れるようになり、中央通り商店街も含めた新たな観光ルートが生まれました。各店舗でも、観光客向けの商品を揃えるなどの工夫を行っています。

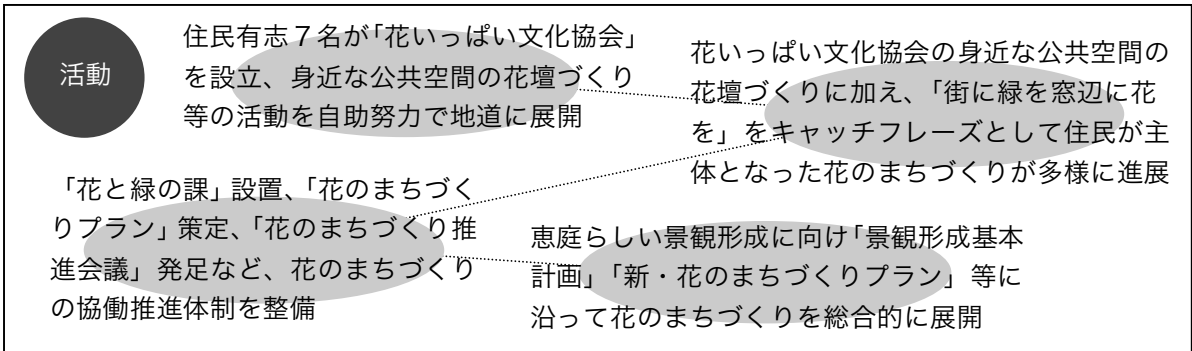
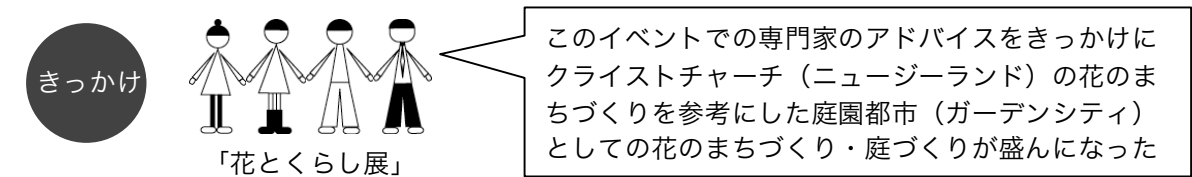
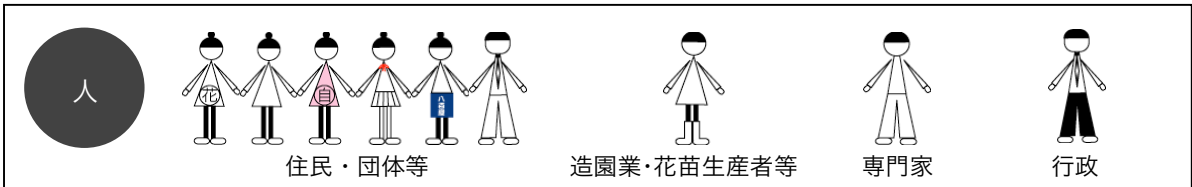
>>景観まちづくりは、空間的な整備のみで実現されるものではありません。地域の住民や来街者のニーズに応える魅力的なソフトを導入することが、長期的な成功へと繋がります。

>>魅力的なまちなみ整備は、観光振興や地域の活性化にも繋がります。



「花いっぱい文化協会」は、1961年の設立以来、町内会や学校、花苗生産者などと連携しながら、身近な場所での花のまちづくりを積み重ねてきました。1990年代に新興住宅地として造成された恵み野地区を中心としてガーデニングが盛んになり、「花のまち・恵庭」との評価を獲得するようになりました。

個人・各種団体・企業・花苗生産者・行政など、多くの関係者の協働により、恵庭の名にふさわしい庭園都市を目指した花のまちづくりが彩り豊かに進められています。



- 住民・団体等**
- 各種団体による日常的な花植え活動の継続的实践
  - フラワーガーデニングコンテスト等の実施
  - ガーデニングや公共花壇等の花植え等への参加拡大

- 花のまちづくり推進会議**
- 「花とくらし展」等の企画・実行とそれらを通じたネットワーク・交流の充実
  - 花はな通信・花マップの発行等による啓発活動

- 造園業・花苗生産者等**
- 「花いっぱい文化協会」会員への花苗の提供・斡旋
  - フラワーガーデニングコンテスト支援(費用負担・審査など)
  - 各種講習会の開催

- 行政**
- 花のまちづくりを一元的に担当する「花と緑の課」設置
  - 花のまち並み推進事業から助成金を支給
  - 公共花壇等の植栽管理委託を通じ住民等の活動を促進・支援

改めて恵庭の将来を  
考えてみたとき、  
花いっぱい文化協会  
の活動の蓄積もあり、  
「花を活かした  
まちづくり」がピ  
ジョンとして浮かび  
上がりました。

でも 30 年後も  
魅力的…?

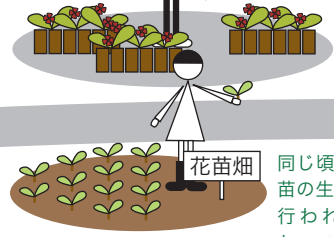
新しいまちって  
魅力的だ

町内会や学校がつ  
くった花壇のコン  
クールも毎年行わ  
れています。

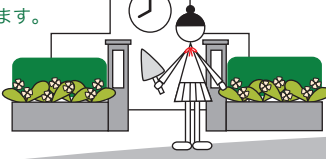
住民有志が「花いっぱい文化協会」を  
設立し、自ら花苗を育てるなど、完全  
な自助努力により、身近な公共空間の  
花壇づくりを続けています。

1981

花いっぱい  
文化協会



同じ頃、恵庭で花  
苗の生産が盛ん  
に行われるよう  
になってきました。



花いっぱい文化  
協会を通じて、生産者から花苗の供  
給を受け、学校でも子どもたちが花  
壇づくりに取り組んでいます。

花とくらし展



ガーデンシティの  
先進地へ

1990

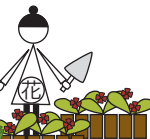
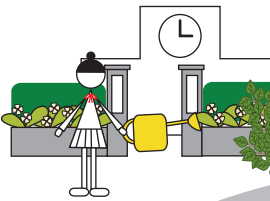


行政職員、花苗の  
生産者、市民が  
ニュージーランド  
のクライストチャーチ  
に視察に出かけました。

視察の感動を  
市民に報告。市民にも感動の輪が  
広がり、花のまちづくりの気運が  
高まりました。

私たちが活動  
続けています

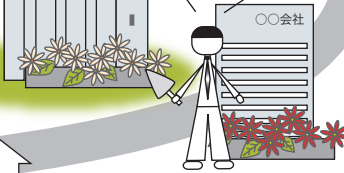
まちなみも  
気になるね



楽しそう！私たちも  
やろうよ！

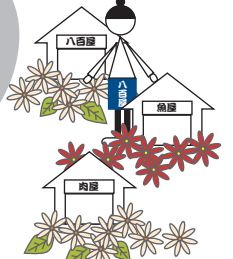


会社の花壇を  
きれいに



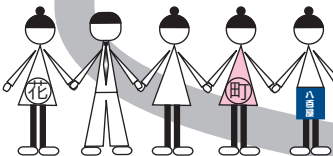
企業の庭園や個人宅の庭でも、花  
づくりに取り組み始めます。これ  
を通じて「花のまちづくり」の意  
識が育まれていきました。

商店会でも  
やろう！



周辺の商店会でも、  
それぞれ花壇づく  
りが行われます。

情報共有できる  
組織つくろう



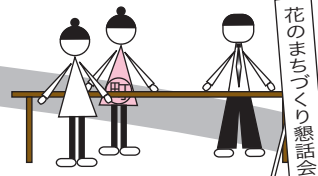
花のまちづくりに関する情報共有を  
図るため、町内会・老人クラブ・商  
店街・花づくり愛好会などを束ねた  
組織を立ち上げます。

美しい恵み野  
花の街づくり推進協議会  
(花協)

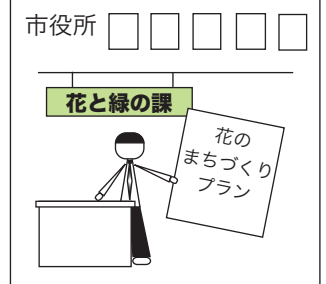


花に関する窓口  
設置して

花のまちづくりの  
ためのプランを  
つくろう



窓口設置の要望を機に、市は市民と  
の協働作業で「花のまちづくりプラン」  
の検討を始めます。



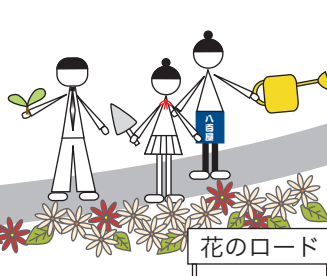
花のまちづくりプランの策定  
と併せて、市に「花と緑の課」  
が新設されます。また、  
数多い市民グループと  
協働して花のまちづく  
りを進めていけるよう  
「花のまちづくり推進会  
議」を立ち上げます。

2003

花のまちづくり  
地域資源に

花のまちづくりは恵庭の  
大事な景観まち  
づくり

美しい  
まちなみ  
大賞

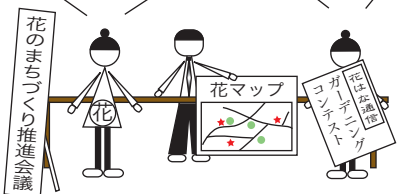


花を愛する多くの人々、花苗の生産者、  
まちにあふれる花…。これらを地域資源  
として活かし、花のまちづくりをいっ  
そう発展させていくことを目指してい  
ます。

「花の千人植え」という、多くの人が参加する花のロード  
づくりが行われたり、これまでの活動が評価されて「美しい  
まちなみ大賞」を受賞したりしています。

「花とくらし展」の  
今年の企画は…

マップや通信  
つくろう





## □景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント□

## 原則1 《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

## ●市民や企業による身近な空間における花のまちづくり活動の蓄積

- ・1961年、「郷土を花いっぱい緑いっぱいに」を合言葉に「花いっぱい文化協会」が設立されて以来、今日に至るまで、花苗の生産と斡旋、花壇造成、記念植樹、花壇コンクールなど、身の回りの公共空間を花や緑で彩る活動を積み重ねています。
- ・さらに、1990年代以降、ニュータウンに造成された恵み野地区を中心として、町内会・老人クラブ・商店街・花づくり愛好会など、地域ぐるみで花のまちづくりに取り組む人たちが着実に増えていきます。また、以前から花と緑の工場づくりに熱心な「サッポロビール北海道工場」など、市民や企業による敷地内からまち並みへとあふれ出すような花のまちづくりが多様に実践されてきています。
- ・これらの身の回りの空間に着目した地道な活動の蓄積が、恵庭市が「花のまちづくり」を展開する大きな基盤となっています。

>>自宅の庭や町内の公園の一角など、身近な空間を花や緑で飾る活動は、比較的取りかかりやすく、愛着を覚えやすい場所であり、景観上の効果も把握しやすいという点で有効です。

## ●北海道を代表する花苗生産地というまちの特性を活かす

- ・恵庭市では、1960年代より花苗の生産が盛んになり、花の大消費地である札幌市との近接性などの好条件もあり、1980年代には北海道を代表する花苗生産地となりました。現在も花苗の生産に関しては道内トップクラスのシェアを誇ります。恵庭市の花のまちづくりは、花の一大生産地であるというまちの特性を十分に活かしながら展開されています。
- ・また、花のまちづくりを通じて、恵庭市が、花の消費量が多いまち、花に対する見識の高い住民が多いまちとなることで、花の生産地としての競争力強化につながるの狙いも持っています。

>>地場産業と景観まちづくりをうまく連携させることで、その地域らしさのある景観形成の推進が期待できますし、地場産業の振興にもつながる可能性があります。

## ●「恵庭」という地名を体現する「庭園都市」づくり

- ・恵庭市の花のまちづくりは、「恵庭＝恵まれた庭」という地名にちなんだまちづくりの考え方です。これは、造園家で東京農業大学教授の進士五十八氏の「本格的に花のまちづくりを展開するならば、世界的に著名なガーデンシティ（庭園都市）であるニュージーランドのクライストチャーチの花のまちづくりを参考にしたらどうか」というアドバイスに後押しされています。このアドバイスが、恵庭市が本格的に花のまちづくりに取り組むことになる大きな推進力を与えたと言えるでしょう。
- ・また、恵庭市には、かつてスズランの大群落があり、スズラン狩りは初夏の風物詩として数万人を集客する一大イベントでした。もともと「花（スズラン）のまち」としての歴史もありました。

>>地名や町名は、その地域の歴史的な記憶をとどめていたり、地域の人たちが共有できるイメージを備えていたりするなど、まちづくりの方向性を考える上で、大きなヒントとなります。

## 原則2《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

### ●花のまちづくりの礎を築いた「花いっぱい文化協会」

- ・1961年、7名の有志により設立された「花いっぱい文化協会」は、半世紀近くにわたって身近な公共空間の花いっぱい運動を完全な自助努力により実践し続けています。現在では、町内会や学校をはじめ、多くの団体が加入する全市的な組織に発展しています（平成19年度には76団体）。花苗の生産者も会員になっており、花苗の生産と消費を結びつけた組織となっている点も特徴の一つです。
- ・会員の花に関する技術の向上と普及を図るため、花壇のデザインや花の生育状況等を審査・表彰する花壇コンクールの実施や、会員相互の親睦と技術向上を目指した研修会などの活動を積み重ねています。1990年代以降、恵庭市は「花のまち」としての全国的な評価を固めつつありますが、その礎は、花いっぱい文化協会の地道な活動にあったと言えるでしょう。
- ・このような活動実績を信頼され、グリーンベルト（恵庭大通線）の花壇や、黄金フラワーロードの沿道花壇など、公共空間における緑化・植栽の推進において大きな役割を果たしています。

>>景観が形成されるには、長い時間が必要であり、地道に活動を継続することが重要となります。地道な景観まちづくり活動の蓄積が、その地域の個性となるような景観を生み出します。

### ●「花のまちづくり」活動を自主的に展開する市民等の多様な主体

- ・恵庭市の花のまちづくりは、「花いっぱい文化協会」をはじめ、町内会、学校・PTA、商店街、恵み野地区で地域ぐるみの花のまちづくりに取り組んでいる「美しい恵み野花の街づくり推進協議会」、遊休市有地を花畑に活用する市民有志、花と緑の工場づくりで知られるサッポロビール北海道工場など、花を愛する多くの主体による多様な活動に支えられています。
- ・それぞれの関心や立場に応じて、さまざまなグループが形成され、活動が展開されています。いずれの活動も、基本的には市民や企業、グループなどが自主的に創意工夫を凝らして取り組んでいるものです。自らの意思で活動を展開していることが、息の長い活動の継続につながっています。
- ・また、将来にわたる持続的な活動という観点からは、恵庭市内の全ての学校で子どもたちが熱心な花壇づくりを行っていることが特徴です。学校とPTAが「花いっぱい文化協会」を通じて花苗を用意し、児童・生徒が育成管理を行っています。子どもたちによる花壇づくりは、花の景観の創出であると同時に、担い手の育成であり、家庭や社会の意識啓発を促す効果もあります。



彩り豊かな漁町商店街



遊休市有地が「いこいの花畑」に



子どもたちがつくる学校の花壇

>>身近な景観形成においては、ひとりひとりの関心や立場に応じて、楽しみながら自主的に景観まちづくり活動に取り組めるような組織づくりも有効です。町内会や商店街、学校などの既存組織の活用や、愛好会のような緩やかなグループづくりなどが考えられます。

### ●協働体制の構築：「花と緑の課」の創設と「恵庭花のまちづくり推進会議」の設置

- ・1990年に始められた「花とくらし展」は、当初、市民の意欲や行動力を活用した実行委員会方式で運営されていましたが、行政の窓口は必ずしも固定されていませんでした。花のまちづくりに関連するその他の取り組みもさまざまな部局を介して行われており、花のまちづくりに関わる市民等からすれば、窓口の一元化が望まれていました。一方、市民等による自主的な花のまちづくり活動が進展するに連れて、さまざまな団体やグループが組織されるようになり、行政の立場からしても、それらの各団体からの要望等に個別に対応することが難しくなっていました。
- ・そのような状況で、「美しい恵み野花の街づくり推進協議会」から、花と緑の担当であることを明確に表した一元的な窓口設置の要望がありました。それを機に、市は、総合計画に位置づけられていた「花のまちづくりプラン」を検討することとし、市民を交えた「花のまちづくり懇話会」を設置して2年間をかけて議論を重ね、1998年3月に「花のまちづくりプラン」を策定しました。プラン策定に合わせて、4月に行政の一元的な窓口となる「花と緑の課」を設置するとともに、「花のまちづくりプラン」の実行組織として、前記のような花のまちづくりに関わる多様な団体で構成する「恵庭花のまちづくり推進会議」を11月に設立し、協働による花のまちづくりの推進体制が整いました。
- ・「恵庭花のまちづくり推進会議」は、「花とくらし展」の企画開催、マップや通信の発行を通じた花のまちづくりの啓発事業、ネットワーク形成のための講習会、全市域を対象としたフラワーガーデンニングコンテストの開催などを行っています。「花と緑の課」は、花のまちづくり推進会議の事務局機能を果たすとともに、恵庭市が関わる花のまちづくり活動はもちろんのこと、国道や道道の植栽管理など、国や北海道との連携を要する活動についても一元的に窓口となっています。

≫景観まちづくりは協働で継続的に取り組むことが重要となるので、そのための適切な推進体制づくりが欠かせません。市民等の意欲や行動力を景観づくりの推進力に活用できる体制、多岐にわたる諸調整を含めた一元的な対応を可能とする行政の体制などが求められます。

#### 原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

### ●市民・企業・行政、生産と消費を結びつける「花とくらし展」

- ・1990年、市制施行20周年記念事業として、「まちに緑を窓辺に花を」をテーマに「恵庭花とくらし展」が開催されました。市民に花とのふれあいの場を提供し、花の生産者と花の利用者・消費者を一体的に振興することや、花を暮らしに普及させることを意図したイベントで、以後、毎年開催されています。1998年以降は、「花のまちづくり推進会議」の主催となり、市民が主導的な役割を果たしながら運営されています。
- ・「花とくらし展」を通じて、ガーデニングや花のまちづくりに対する市民の関心喚起・意識啓発、花苗生産業や造園業の振興、「花のまち」としての情報発信やPR等が図られており、花のまちづくりの推進を下支えする役目を果たしています。



多くの市民でにぎわう「花とくらし展」

≫市民をはじめとする多くの関係者の景観まちづくりに対する関心や意識を高めるためには、景観まちづくりに関連するイベント等を定期的に行うことなどが効果的です。



### ●「花いっぱい文化協会」が内包する花苗供給システム

- ・花のまちづくりを行う場合、住民等のまちづくりの担い手、花を植えたり飾ったりする場所と併せて、素材となる花の供給が重要となります。「花いっぱい文化協会」は、会員相互で花苗を供給（幹旋）できるようなシステムを持っています。花苗の生産者（花苗生産組合）も協会の会員となっており、その生産者が供給する花苗を、町内会や学校等の会員は安価（原価）で購入することができる仕組みで、個人も町内会を通じて花苗を購入することができます。あくまでも「会員相互での幹旋」というシステムであり、市民などの特定の消費者を対象にした廉価販売ではありません。
- ・この花苗供給システムを通じた市内の旺盛な花苗の需要は、花苗の品質の維持・改良、新商品の開発など花苗の生産を強化、振興することにも役だっています。

≫花のまちづくりにおける花苗のように、景観まちづくりの推進に不可欠な素材を安定的に確保・供給できる仕組みは、景観まちづくりの推進基盤として重要です。

### ●創意工夫を楽しむ表彰する：花壇コンクール・フラワーガーデニングコンテストなど

- ・「花いっぱい文化協会」では、40年以上の長い期間にわたって、毎年、町内会等が管理する公共的な空間の花壇や子どもたちが育てる小中学校の花壇の表彰コンクールを実施しています。花壇づくりの楽しさにコンクールが刺激と励みを与え、毎年、創意工夫にあふれた花壇づくりが進められています。
- ・恵み野地区では、世界的に著名なニュージーランドのクライストチャーチのガーデンコンテストに触発された住民らによって、1991年からオープンガーデニングコンテストが実施されています。当初は公募方式でしたが、3年目より恵み野地区の全戸を審査対象としています。このコンテストは、ガーデニングそのものではなく、道路から見た庭の景観的な美しさを評価、表彰するところに特徴があります。このコンテストがガーデニングに取り組む人々を増加させ、また、沿道まち並み景観への関心を高めることにもなりました。美しい庭のまち並みを楽しみに訪れる観光客も増加しています。
- ・2001年から、花のまちづくり推進会議により、市内全域を対象に個人の庭や企業・通り等のガーデニングを表彰するフラワーガーデニングコンテスト「花風人」も実施されています。
- ・また、恵庭の花のまちづくりの実績は、全国レベルでも高く評価されており、緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰（花いっぱい文化協会・平成7年、サッポロビール北海道工場・平成13年）、都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」国土交通大臣表彰（恵み野地区・平成16年）など、多くの表彰歴を誇っています。これらの表彰も活動に励みと勢いを与えています。



創意工夫にあふれた美しい花壇



道路から楽しめるガーデニング



庭巡りを楽しむ観光客

≫景観まちづくりの成果をコンクールやコンテスト等を通じて評価することは、主体性を持って自主的に景観まちづくり活動に取り組む動機づけや励みを与えることにつながります。

≫コンクール等の過程や成果に触れられる機会を工夫することにより、景観まちづくりの意義や魅力を広く周知する効果や、観光・交流の資源となることなども期待できます。

### ●住民等の自主的な景観まちづくりを支援する助成制度

- ・恵庭市では、住民が自主的に花を活かした景観づくりに取り組むことを推進・支援するため、「花のまち並み推進事業助成」を行っています。
- ・景観形成に資すると認められる道路や河川で、その整備が実施・計画されている区域のうち、概ね200mを超える街区単位や橋梁相互の区間を対象として、花を生かした景観まちづくりに取り組む団体等に活動費用助成を行う仕組みです。助成額は、対象経費の1/2以内とし、花苗・緑化木・プランター等の購入に対しては20万円、花壇等の設置に対しては50万円を上限としています。平成19年度では10団体に助成を行っています。

>>住民等による自主的な景観まちづくり活動が、まちづくりの方向性として行政から見ても適切だと判断できる場合、その活動を支援する費用助成等の措置を講じることも有効です。

### ●「花のまちづくり」を恵庭の地域資源として各種行政計画に位置づけ

- ・恵庭市の花のまちづくりは、花いっぱい文化協会の地道な取り組みをはじめ、恵み野地区での活発な花のまちづくりの取り組み等を中心とした住民活動や、企業、花苗生産者等の自助努力で成果を積み重ねてきました。行政も「花のまちづくり」を重要視する姿勢を明確にできています。
- ・そのきっかけは、1990年に市制20周年を記念して開催された「花とくらし展」であり、そこでのクライストチャーチにおけるガーデンシティづくりの紹介でした。花のまちづくりに恵庭の明るい将来を重ね合わせていたのです。「花とくらし展」を契機に恵庭のまちづくりの方針は「花のまちづくり」へと大きく舵が切られました。
- ・第3期総合計画で方向づけられていた「花のまちづくりプラン」が1998年に策定され、2006年から始まる第4期総合計画では、将来都市像が「水・緑・花 人がふれあう生活都市 えにわ」とされており、「花」が明確に位置づけられています。2008年3月には「花のまちづくりプラン」の改訂、「景観形成基本計画」の策定、「観光振興計画」の策定がなされていますが、いずれの計画においても「花のまちづくり」は重要な取り組みとして位置づけられています。今や、花のまちづくりは、恵庭市のまちづくりの重要な芯になるものとなっています。
- ・「花のまちづくり」全体を恵庭らしい重要な地域資源と捉え、さまざまな行政計画に位置づけることにより、暮らしの豊かさの実感、花のまちづくり関連産業の振興や雇用の創出、観光・交流の創出・活性化なども視野に入れた総合的な施策の展開が志向されています。

>>個性的な景観まちづくりを重要な地域資源と捉えることにより、分野を超えた総合的な政策として展開することが検討できるでしょう。そうすることにより、それぞれの施策が相乗効果を発揮し、厚みのある景観まちづくりを推進することも期待できます。